

関係詞の that は接続詞である

時崎 久夫

1. はじめに

小論は、伝統的に「関係詞の that」と呼ばれているものは、関係詞ではなく、接続詞であるということを述べる。that が which などの wh-語の関係詞と異なるということは、生成文法では 1970 年代から仮定されており、Huddleston (1984), Huddleston and Pullum (2002)でも論じられているが、辞書や学校文法にその成果が生かされていない。小論の目的は、that に関係詞の用法がないと考えることで、「関係詞の that」の用法が正しく理解でき、英文法の例外が減るということを示すことである。まず第2節で、生成文法による関係詞と接続詞の分析を概観する。第3節では、「関係詞の that」を、平叙の内容節 (declarative content clause) を導入する従属接続詞の that と考えるべきだとする Huddleston (1984), Huddleston and Pullum (2002)の4つの論点を解説する。第4節では、さらに5つの論点を付け加える形で、「関係代名詞の that」と関係代名詞の which および指示代名詞の that との相違点を示し、that が関係代名詞でないことを述べる。また「関係代名詞の that」と接続詞の that の共通点を示し、「関係代名詞の that」は接続詞であることを述べる。*

2. 生成文法による関係詞と接続詞の分析

生成文法では、接続詞の that を補文標識 (complementizer: 初期は COMP、1980 年代からは C と略) として扱ってきた。主節に対して、動詞や前置詞の目的語 (生成文法では補部) となる従属節 (生成文法では補文) の始まりを示す標識と that を考える。

(1) Charles thinks [_{CP} that [_{IP} Ms Kinian is a genius]]

* 本研究は、平成 21 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 18520388 及び基盤研究 (A) 20242010) による成果の一部である。

that は C で CP の主部(head)であり、補部として節(IP)を取っている。

そして、wh 語の関係詞は(2a)のような基底位置から(2b)のような C の指定辞(Specifier)の位置に移動してくる。

- (2) a. This is the house [CP that [IP John lives in *which*]]
b. This is the house [CP *which* [C that [IP John lives in]]]

この(2b)のままでは文法的に正しくない。which か that の一方または両方が削除される必要がある。すなわち、許される形は次の3つとなる。

- (3) a. This is the house [CP *which* [C ~~that~~ [IP John lives in]]]
b. This is the house [CP ~~which~~ [C that [IP John lives in]]]
c. This is the house [CP ~~which~~ [C ~~that~~ [IP John lives in]]]

伝統文法や学校文法では(3a)を関係代名詞の *which*、(3b)を「関係代名詞の *that*」、(3c)を関係代名詞の省略と呼んでいるのである。

(2b)が許されないのは、移動した関係詞の wh 語が節の始まりを示す働きをするため、補文標識の *that* を示す必要がなく、明示してしまうと冗長になるためであると考えられる。これは、Chomsky and Lasnik (1977)が二重補文標識フィルター(Doubly-filled Comp filter)で排除したものであるが、英語の方言や他の言語では、wh-語と補文標識の共起を許す場合がある (Bayer and Brandner 2008 を参照)。

伝統文法や学校文法は、先行詞の右に1つの位置しか見えないために、(3b)の *that* を「関係代名詞の *that*」として、(3a)の関係代名詞の *which* と同じに考えている。しかし、生成文法では、wh-語は基底位置から補文標識 C の指定辞位置に移動してくるのに対し、*that* はもともと補文標識の位置に基底生成されるということである。すなわち、*that* は wh-語と異なる位置に生じる、異なる要素と考えられている。

3. 関係詞の *that* は接続詞 : Huddleston and Pullum (2002)の論点

伝統文法および学校文法では、関係代名詞として *who*, *which*, *that*、関係副

詞として、where, when, why, how, that を提示する。しかし、that を関係詞（特に関係代名詞）として分析することには数多くの問題がある。Huddleston and Pullum (2002:1056) は、「関係詞の that」を、平叙の内容節（declarative content clause）を導入する従属接続詞の that と考えるべきだとして、次の4つの点をあげている（Huddleston (1984:397)も参照）。

- (4) a. 先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲である
- b. 上方への浸透がない
- c. 定形である
- d. 省略可能である

これらの点を順に見ていこう。まず(4a)の先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲であることは、次の例で示されている。

- (5) a. They gave the prize to the girl [that spoke first]. [who]
- b. Have you seen the book [that she was reading]? [which]
- c. He was due to leave the day [that she arrived]. [when]
- d. He followed her to every town [that she went]. [where]
- e. That's not the reason [that she resigned]. [why]
- f. I was impressed by the way [that she controlled the crowd]. [*how]
- g. It wasn't to you [that I was referring]. [no wh form]
- h. She seems to be the happiest [that she has ever been]. [no wh form]

that は(5a-e)のように、さまざまな wh-語の代わりをするだけでなく、(5f-h)のように、対応する wh-語がない場合にも用いられる。このような広範囲の用法を持つ代用形は他に例がない。¹

次に、(4b)の上方への浸透がないことは、次の例で示される。

¹ (2g)や次の(i)と(ii)のような分裂文も一緒に扱われ、下線部に対応する代用形が英語にないことが指摘されている。

- (i) It was with considerable misgivings [that her parents agreed to this proposal].
- (ii) It was in order to avoid this kind of misunderstanding [that I circulated a draft version of the report].

- (6) a. the woman [whose turn it was]
 b. * the woman [that's turn it was]
- (7) a. the knife [with which he cut it]
 b. * the knife [with that he cut it]

(6a)や(7a)のような複合的な wh 関係詞句に対応する複合的な that 関係詞句は(6b)や(7b)に示されるように存在しないのである。

3つめに、(4c)にあげたように、that 関係節は定形でなければならない。

- (8) a. a knife with which to cut it
 b. * a knife that to cut it with
 c. a knife to cut it with

非定形の to 不定詞は、(8a)のように wh 関係節 (句) では許されるが、(8b)のように that 関係節 (句) では許されない。被修飾名詞に which も that も後続しない不定詞句は、(8c)のように許される。²

4つめに、(4d)にあげたように、「関係詞の that」は省略できる(p.1055)。

- (9) a. The car (that) I took was Ed's.
 b. He's not the man (that) he was a few years ago.
 c. I can't find the book (that) you asked for.
 d. He's the one (that) they think was responsible for the first attack.

そして、この省略可能性は接続詞の that も同様に持っている(p.953)。

- (10) a. I think [it's a good idea].
 b. She said [they'd had a wonderful holiday].
 c. It's a good job [we left early].

以上、Huddleston and Pullum (2002:1056)の、that を、平叙の内容節

² *a knife with that to cut it は第2の上方への浸透がないことでも排除される。

(declarative content clause) を導入する従属接続詞の *that* と考えるべきだとする、4つの点を見た。(4a), (4b), (4c)は「関係詞の *that*」は *wh*-語の関係詞と異なるということ、(4d)は「関係詞の *that*」は接続詞の *that* と類似しているということを示している。次節では、こうした点を示す事実をさらにあげて、「関係詞の *that*」は関係詞でなく接続詞であるということを示したい。

4. 関係詞の *that* は接続詞：さらなる事実

4.1 「関係詞の *that*」には非制限用法がない

この節では、「関係詞の *that*」の中でも、「関係代名詞の *that*」に焦点を絞って、関係代名詞の *which*、指示代名詞の *that*、および *those* や *this* という語との比較によって、「関係代名詞の *that*」が関係代名詞でなく、接続詞であることを述べていく。第1に、関係代名詞の *which* と異なり、「関係代名詞の *that*」には非制限用法がないということである。関係代名詞の *which* には、次に示すような非制限用法がある (『ジーニアス大英和辞典』)。

- (11) a. [単一の語を先行詞として] そしてそれは[を]
b. [句・節・文またはその内容を先行詞として] そしてそのことは
c. [人を表す名詞・形容詞を先行詞として] …であるがそれは[を, に]…
- (12) a. Her clothes, which are all made in Paris, are beautiful.
b. Her feet were bare, which [as] was the custom in those days.
c. Ann is a vegetarian, which [×who, ×that] no one else in my family is.

これに対し、「関係代名詞の *that*」は通例制限用法として用いられる。

- (13) She was offended by the letter that accused her of racism.

(Huddleston and Pullum 2002: 1064)

(13)では、*that accused her of racism* が *letter* の集合を限定している。そして、非制限的關係詞節においては、*that* は用いることができない(Quirk et al. 1985: 1257-1258)。

- (14) a. * I spoke to Dr Spolsky, that was unwilling to give further details.
b. I spoke to Dr Spolsky, who was unwilling to give further details.

ただし、Hawkins (1978: 284)は「先行詞が無生物である場合には、例外的に関係代名詞 *that* が非制限用法で用いられることがある」と述べて、次の例を挙げている。

- (15) a. The box, that (incidentally) had jewels in (didn't it?), was stolen.
b. * The girl, that was (incidentally) tall (wasn't she?), left the party early.

しかし、(15a)のような例は非標準的な用法と考えるべきであろう。Quirk et al. (1985: 1257-1258) では、?* のような文法判断がなされている。

- (16) a. ?* This excellent book, that has only just been reviewed, was published a year ago.
b. This excellent book, which has only just been reviewed, was published a year ago.

よって、「関係代名詞の *that*」には基本的に非制限用法がないと考える。

4.2. *that* は先行詞に有生のものをとれる

第2に、*which* 先行詞は物・事を先行詞とするのに対し、「関係代名詞の *that*」は、人・動物も「先行詞にとる」ことができる（例文は『ジーニアス大英和辞典』による）。

- (17) a. The bicycle which I sold was old.
b. * They are the people which live next door.
(18) a. The street that leads to our school is very wide.
b. He's the man that lives next door to us.

(17b)が容認されないのは、*wh*-語の関係詞の場合は、人の先行詞に対して、*who*

という形を持っているからである。that は指示代名詞としても、人と物を指せるため、このことは、「関係代名詞の that」を接続詞とする積極的な証拠とはならない。しかし、「関係代名詞の that」が接続詞であって、それ自体は先行詞を必要としないと考えれば、簡単に説明できる事実である。

4.3 「関係代名詞の that」は代名詞としての数の一致をしない

第3点は、「関係代名詞の that」が指示代名詞の that と異なることである。代名詞の that は単数形であり、複数形には those を用いるが「関係代名詞の that」には複数形 those はなく、先行詞が単数でも複数でも that が用いられる。

- (19)
- a. Those are happy days.
 - b. They don't have the books that you recommended.
 - c. * They don't have the books those you recommended.

関係代名詞も代名詞の1種であるから、関係代名詞としての that が存在するのであれば、複数の先行詞を指す複数形の those が関係代名詞として使われても良さそうであるが、(19c)のように許されない。学校文法では、よく関係代名詞の先行詞は何かということが問われるが、(19b)のような例で that の先行詞が何かと問うと、複数名詞の books ということになる。これは学生・生徒に疑問を起こさせることになるが、関係代名詞 that には複数形がないという言い方をせざるをえない。

4.4 複数形の those は関係代名詞にも接続詞にもならない

第4点は、「関係代名詞の that」と接続詞の that の共通点である。関係代名詞の those が存在しないのと同様に、接続詞の those も存在しない。

- (20)
- a. * They don't have the books those you recommended.
 - b. He said (that) it was a mean practice and that I must try not to do it any more.
 - c. * He said those it was a mean practice and I must try not to do it any more.

(20c)のように、2つの節を同時につなぐような接続詞の *those* は存在しない。複数形 *those* が用いられない点が、「関係代名詞の *that*」と接続詞の *that* で共通している。

4.5 近距離指示の *this* は関係代名詞にも接続詞にもならない

第5に、空間的・心理的に話し手から遠いものをさす指示代名詞の *that* は「関係代名詞の *that*」と接続詞の *that* の用法を持つが、空間的・心理的に話し手に近いものをさす *this* は関係代名詞の用法も接続詞の用法も持たない。

- (21) a. * My cousin owns the dog *this* rescued the children.
b. * He knew *this* she was married.

この「関係代名詞の *this*」がないという事実も、「関係代名詞の *that*」は接続詞の *that* であるとするれば、接続詞の *this* がないということから自然に説明されることである。「関係代名詞の *that*」を認める学校文法・伝統文法では、関係代名詞には *this* がないということ、接続詞に *this* がないこととは別に述べておかななくてはならない。

以上この節では、「関係代名詞の *that*」は関係代名詞でなく接続詞の *that* であると考えべきことを示す5つの事実を述べた。

5. まとめ

学校文法・伝統文法で「関係代名詞の *that*」と呼ばれるものは、関係代名詞でなく接続詞の *that* であるということ、*that* を補文標識として *wh*-語と区別する生成文法の立場から述べてきた。Huddleston and Pullum (2002)の、先行詞のタイプと関係化される要素が広範囲である、上方への浸透がない、定形である、省略可能である、という4つの論点を概観し、さらに、「関係代名詞の *that*」には非制限用法がない、先行詞に有生のものをとれる、代名詞としての数の一致をしない、*those* は関係代名詞にも接続詞にもならない、*this* は関係代名詞にも接続詞にもならない、という5点を示して証拠とした。

学校文法で、「関係代名詞の *that*」をこのまま将来も関係代名詞として教え続けていくかは、大きな問題である。理解力が十分でない学生・生徒に、接続詞として教えることは混乱させることになるかもしれない。ただ、理解力があり、

疑問を持つ学生・生徒には、別の考え方として紹介し、文法の例外を少なくすることが望ましい。少なくとも、教員としては、考え方を知り、理解しておくことは必要であると思われる。

参考文献

- Bayer, Josef and Ellen Brandner. 2008. On wh-head-movement and the doubly-filled-comp filter. *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 87-95.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik. 1977 Filters and control. *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and indefiniteness: A study in reference and grammaticality prediction*. London : Croom Helm.
- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- van Riemsdijk, Henk and Edwin Williams. 1986. *Introduction to the theory of grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.